

令和7年度普及活動の実績
普及活動の軌跡
(Part - 31)



ネギの土づくり研修会



トマト「総合防除」視察研修会



次世代の水稲生産者育成研修会



ナシの産地協議会

令和8年3月
長生農業事務所
長生農業改良普及事業協議会

成果集発刊にあたって

長生地域の農業は、温暖な気候の下、生産者の高い技術と意欲で築き上げられた「長生／ながいきブランド」の産地として発展してきました。

令和7年度の普及指導計画では、「第6次長生地域農林業振興方針」に基づき、「地域を支える多様な担い手の育成・確保」、「力強い園芸産地づくり」、「水田をフル活用した水田農業経営の安定化」、「畜産経営の体質強化」について、農業・農村の活性化、安全な食料の安定供給、気候変動及び自然災害等への対応を含めた普及指導課題に取り組みました。

担い手の育成については、新規就農希望者に対し関係機関と連携を図り、営農開始に向けた支援を行うとともに就農後の早期定着を支援しました。また、安定的な経営を行えるよう、学習の機会を設けることにより栽培技術・経営管理の能力向上に向けた指導を行いました。

長生地域の主力品目であるトマト、ねぎ、たまねぎ、梨などでは、産地の維持・振興に向けて、新たな担い手の確保、機械導入等による省力化、生産力向上の取組、重要病害虫への防除技術の向上等の活動を展開しました。

水田営農については、稲作の収益力向上を目指し技術改善に取り組むとともに集落営農組織や個別経営体の経営改善を支援しました。また、若手農業者を対象に継続的に研修会を開催し、水稻担い手の育成及び交流を図りました。畜産では、高騰する輸入飼料への対応として、飼養方法の改善やコントラクター組織を利用した国産粗飼料の安定生産を推進しました。

本冊子では、令和7年度の上記活動の中から、「普及活動の成果・報告」4課題、「情報提供」7課題について、生産者の皆様をはじめ、市町村、農業団体、試験研究機関等の協力を得ながら「普及活動の軌跡 P a r t - 3 1」として取りまとめました。

これらを今後の長生地域での農業振興、事業推進等に御活用いただければ幸いです。

令和8年3月

長生農業事務所

所 長 毛利 雅史

目 次

1 普及活動の成果・報告

- (1) ねぎ産地の維持を目指して 1
 - 産地を支える担い手の確保と生産力の強化 —
 - 【第 25 回千葉県普及活動成果発表大会発表課題】
- (2) トマトの「総合防除」の徹底に向けて 4
 - 産地への働きかけと個別指導の実施 —
- (3) 次世代に繋がる梨産地を目指して 6
 - 果樹産地構造改革計画の策定 —
- (4) 20 年後の長生地域の水稻生産を守るために 8
 - 「次世代の水稻生産者育成研修会」を開催 —

2 情報提供

- (1) 水稻湛水直播栽培の普及に向けた取組 11
 - 直播栽培の安定化に向けた栽培試験と技術普及 —
- (2) 地域に愛され、活気ある直売所をめざして 13
 - 地域農業・産地力アップ女性リーダー講座修了生の活動 —
- (3) トマトの高温対策の取組 14
 - 裂果に強い「麗妃」の普及 —
- (4) たまねぎ収量増加を目指したべと病防除に向けて 15
 - 産地全体へ向けた、べと病防除方法の周知 —
- (5) イチゴの栽培技術向上と新規就農者支援 16
 - 「長生いちご研究会」活動を通じて —
- (6) 持続可能な農業と環境保全への取組 17
 - プラスチックを使用しない水稻元肥一発肥料の模索 —
- (7) 牛が快適に過ごせる環境づくりを目指して 18
 - 取り組みやすい暑熱対策における効果の検討 —

3 参 考

- 令和 7 年度普及現地情報 19

ねぎ産地の維持を目指して

— 産地を支える担い手の確保と生産力の強化 —

活動事例の要旨

J A長生ねぎ協議会、長生農業独立支援センター、市町村等と協力して新規生産者の確保及び育成に取組み生産者数の維持に繋がっている。作期拡大に向けて3年間夏ねぎ研修会を実施し、出荷量の増加も見られた。安定生産に向けて夏季の高温対策の検証等を行った。

1 活動のねらい・目標

長生地域のねぎ産地では、高齢化や後継者不足により、産地の規模縮小が懸念された。そこでJ A長生ねぎ協議会、長生農業独立支援センター、市町村と協力し、新規生産者の受入及び規模拡大を志向する若手生産者へ機械導入等の支援を行い、担い手の確保、育成に取組んだ。また、近年、猛暑や集中豪雨等の気象リスクを始め、難防除害虫の多発等により、従来の方法では秋冬ねぎ栽培が難しくなっている。このことから夏越しがない作型である夏ねぎ栽培の導入や夏季の高温に対する対策技術の検証をするとともに、難防除害虫の対策として交信攪乱剤を活用し、安定生産を目指した。

2 活動の内容

(1) 産地を支える担い手の育成

ア 新規生産者の確保及び育成

農業事務所、J A長生、長生農業独立支援センターや市町村等で就農相談を行い、関係機関内で連携して就農支援を行った。また、補助事業を活用して経営を開始するための機械や施設等の整備を希望する生産者に対し、経営改善計画書の作成を支援した。就農後の技術習得のために、令和元年度からJ A長生、生産者と協力し、秋冬ねぎの主要作業を学ぶ農業塾（ねぎコース）（年7回程度）の開催を支援した。また、サポートチームによる就農状況の確認及び個別巡回指導によりフォローアップを行った。

さらに、栽培開始当初に苦慮している雑草管理の研修会や地域の先輩ねぎ生産者の視察を開催し、ねぎ生産の参考になるように配慮した。

イ 産地の中核を担う経営体の育成

令和6年度に新規生産者や規模拡大意向がある生産者を対象に、他地域（海匠、山武地域）の大規模ねぎ経営体の視察を開催し、雇用の導入状況や栽培技術等に関して情報収集を行う機会を作った。

(2) 生産力の強化

ア 夏ねぎ栽培の導入

令和4年から6年にかけて夏ねぎ研修会を開催した。令和4年は、ねぎの1条トンネル設置研修会、令和5年と6年に夏ねぎの2条・1条トンネル栽培及び露地栽培に関する研修会を開催した。研修会の中では栽培経験者、新規栽培者、関係機関で情報交換を行い、疑問点の解消や栽培上の悩みを共有する時間を設けた。さらに、令和5年は、地域のトンネル栽培経験者の協力を得て、2条トンネルと1条トンネルの設置実演会



写真 1条トンネル設置実演会

も開催した。令和6年は、2条トンネルの設置方法について理解を深めてもらうために、トンネル栽培導入意向者や新規就農者等に、農林総合研究センター東総野菜研究室で開催された夏ねぎ実技研修会への参加を促した。

イ 安定生産に向けた取組

近年多発し対策が急務となっているシロイチモジヨトウの食害軽減対策を検討するために、農薬メーカーや担い手支援課等と連携して交信攪乱剤を用いた現地試験を行った。また、病害虫発生予察注意報をねぎ協議会全体にFAX等で情報提供して防除を促した。

気象変動に対応できるよう土づくりに関する研修会を開催した。研修会は県農林総合研究センターOBを講師に招き、土壌の物理性への理解を深めてもらうため、座学及び現地実習で行った。

夏季の高温乾燥に対する夏越し対策のため、定植時期比較や灌水試験の実証は設置等を行った。

3 活動の成果

(1) 産地を支える担い手の育成

新規生産者は毎年数名ずつ確保され、JA長生ねぎ協議会の会員数は110戸（令和3年）から122戸（令和6年）に増加した（図）。また、農業塾受講者が協議会に加入する動きも出ている。最近では、若手生産者が各地区の出荷組織の役員や研究部会で活躍しており、各組織の活性化に繋がっている。

機械及び施設等の導入を希望する新規生産者に対し、経営改善計画書の作成を支援したところ、令和4年から6年の間に、補助事業を活用し、9戸が導入に至った。

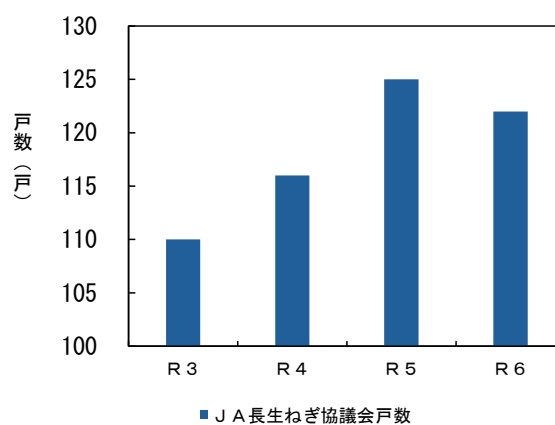


図 ねぎ協議会戸数の推移

管外視察をきっかけに、視察先生産者の管内訪問や省力化機械の情報提供が行われる等、地域を超えて繋がりができた。また、支部の違う管内生産者同士で連絡を取り合うようになり、地域内外で新たな交流が生まれた。さらに、視察先で得た情報をきっかけに省力化機械を導入する生産者や雇用導入を検討する生産者も見られた。

(2) 生産力の強化

ア 夏ねぎ栽培の導入

夏ねぎ研修会は令和4年から6年にかけて延べ42名の生産者の参加があり、参加者の中には、夏ねぎ栽培に取り組む生産者も現れた。地域の先輩生産者の指導や自ら情報収集する生産者の努力もあり、JA長生の夏ねぎ出荷量は、40t（令和3年）から72t（令和6年）に増加した。また、令和6年から管内では少ない2条トンネル栽培に取り組む生産者も現れ、目標とする5月上中旬に収穫することができた。

イ 安定生産に向けた取組

シロイチモジヨトウの交信攪乱剤による食害軽減効果の実証は、調査結果を協力農家に報告し、防除指導に活かした。被害は軽減されたものの、シロイチモジヨトウの発生量が多く、被害の差は明確にならなかった。今年度の改善点を検討し、今後も継続していくこととした。

土壌物理性について学ぶ研修会を開催した結果、研修後に土壌を確認した生産者もおおり土づくりに対する関心を高めることができた。

定植時期を比較するための実証ほを設置したところ定植を遅くした方が、株残りや生育が良い傾向があった。現地でも乾燥するほ場で定植時期を遅らせる動きが出ている。灌水試験実証ほの設置を行ったところ、灌水区の方で欠株が少なく灌水の効果が認められたが、灌水量や土寄せタイミング、品種の選択等、新たな課題が見えてきたので、改善に向けて継続していくこととした。

4 将来の方向と課題

(1) 産地を支える担い手の育成

生産者組織やJA長生等と協力し、今後も新規生産者の基本的な栽培管理技術の習得を支援していく必要がある。また、規模拡大意向がある生産者に対しては、省力化機械等の導入を進めるとともに、出荷調製作業場の改善や雇用の導入等も検討していく必要がある。

(2) 生産力の強化

安定生産を実現するには、土づくり等の基本技術を積み重ねるとともに、引き続き高温対策や夏ねぎ導入などの作型分散を進めていく必要がある。

5 担当グループ 西部グループ、東部グループ

トマトの「総合防除」の徹底に向けて

— 産地への働きかけと個別指導の実施 —

活動事例の要旨

長生地域ではトマトやメロン、キュウリなどが盛んに栽培されているが、近年、様々なウイルス病が微小害虫を媒介して発生しており、収量減少を招いている。病虫害の発生を抑制するには、化学農薬だけでなく、防虫ネットの展張や栽培終了後の適切な処理等の複数の防除手段を組み合わせる「総合防除」が有効である。

今回の活動では、産地全体の取組として研修会や防除暦の見直しを実施し、個別指導として個別課題に対する話し合いや調査を行った。その結果、生産者の防除意識の向上や防除の実践に繋がり、行動の変化に至った。

1 活動のねらい・目標

J A長生施設野菜部会には約 100 名の生産者が所属しており、ほとんどがトマトを栽培している。「総合防除」を産地全体で徹底する必要があるため、令和 7 年度は部会における取組と個々の課題に対する個別指導を実施し、防除意識の向上と防除の実践を促した。

2 活動の内容

(1) 産地における取組

ア 施設園芸での微小害虫・ウイルス病対策研修会

7 月 14 日に研修会を実施し、約 100 名の生産者や関係機関が参加した。研修会では防除の成功・失敗事例を基に、「総合防除」を漏れなく行い、徹底することが呼びかけられた。生産者からは「有意義な研修だった」と好評だった。

イ 「総合防除」視察研修会

10 月 28 日に、先述の研修会で取り上げられた防除の成功事例の視察研修会を実施した。約 10 名の生産者や関係機関が参加し、防虫ネットの展張方法や夏の栽培管理等などを学んだ。防虫ネットについては、自分自身のハウスに帰ってから実践できるように、生産者が自らメジャーを使って計測していた。

ウ 長段どりにおける防除暦の見直し

部会・J A・全農ちば・農業事務所が連携して長段トマト栽培の「防除暦の見直し」を行った。長段どりの栽培期間は約 1 年間に渡るため、薬剤のローテーションが複雑で薬剤散布が後手に回ること



写真 1 視察研修会の様子

があった。そこで、薬効が高いとされる薬剤を暦の前半に設定して初期～中盤を手厚くした。

(2) 個別指導

ア 近隣の生産者による話し合い

ウイルス病の被害に苦慮しているハウスが隣接する生産者4名と関係機関が集まり、今後の方針について話し合った。4名は栽培期間が揃っておらず、微小害虫が施設周辺に常にいる状態だった。そこで、4戸の栽培終了時期を揃えて一斉に施設内外の植物を除去し、栽培休止期間を設けた。

イ 病虫害発生要因の調査

総合防除を実践しているが、ウイルス病の発生が続いているほ場において、発生要因の調査を行った。その結果、栽培終了後に施設内外の植物を徹底的に除去するなどできることを行っていたが、栽培休止期間が短く、微小害虫数がゼロになる前に次の栽培が始まっていたことが分かり、改善点を明確にすることができた。

3 活動の成果

令和7年度に「防虫ネット」を新たに展張した生産者が4名、今後展張する生産者が3名、更新した生産者が2名になった。さらに、施設の出入口に新たに「送風機」を設置して施設外からの害虫の飛び込みを抑える対策をする生産者も2名増えた。新たにネットを展張した(する)生産者の中には研修会を参考にした人や個別指導をきっかけにした人もおり、生産者の意識や行動を変化させることができた。また、長段トマトを栽培する生産者約30名のうち8名が、見直した防除暦に沿って散布し、令和7年12月時点で5名がウイルス病の発生を前年よりも抑制することができた。



写真2 入口の送風機

4 将来の方向と課題

今回の産地における取組・個別指導により、生産者の防除意識の向上と防除の実践を促すことができた。今後も引き続き産地への呼びかけを行いながら、個別指導を通じて実践した防除の効果を検証していく必要がある。

5 担当者 東部グループ

次世代に繋がる梨産地を目指して

— 果樹産地構造改革計画の策定 —

活動事例の要旨

一宮・岬梨組合では、生産者の高齢化や担い手不足から栽培面積が縮小している。そこで、産地協議会や意見交換会を開催し、生産者、関係機関が連携して現状と課題を共有した上で、次世代に繋がる産地作りを目指すための新たな果樹産地構造改革計画（以下、産地計画）を策定した。

1 活動のねらい・目標

一宮・岬梨組合一宮支部では、「ながいき梨」ブランドの県内一の早出し産地として、県内外へ出荷している。しかし、生産者の高齢化や後継者不足により、産地の維持には担い手の確保と出荷量の確保が課題となっている。

本活動では、関係機関が連携して現状と課題を共有した上で、一宮・梨組合全体及び一宮支部としての今後の取り組みを明確にして、次世代に繋がる産地作りを目指すための産地計画を策定することを目標とした。

2 活動の内容

（1）産地計画更新に向けた協議の実施

産地の現状や課題を明らかにするため、農業事務所とJAが連携して組合員向けにアンケート調査を行い、栽培面積、労力、樹齢構成、花粉確保、販売等について取りまとめを行った。

次に一宮・岬両支部の役員、JA、市町村、園芸協会、農業事務所で構成される産地協議会（計3回）にて、産地計画を協議した。

第1回（3月）では、農業事務所からアンケート結果の共有を行った。意見交換では「県内一の早出し産地の地位を維持するため、少しずつ改植を行って、求められる梨品種の収量や出荷量を増やしていきたい。」「意欲のある若手生産者のブロック改植をサポートしたい。」「第三者継承も含めた担い手の確保・育成が必要である。」といった意見が挙げられた。

第2回（6月）では、第1回の協議を元に作成した計画（案）について協議し、既存生産者の規模拡大や繁忙期の労働力確保に向けた臨時雇用の活用、省力化技術の導入支援などについて検討を行った。

第3回（11月）では、過去2回の協議で出された意見を反映し、求められる梨品種の生産を増加するため、品種別の生産目標を含めた産地計画を策定した。



写真1 産地協議会の様子

（２）梨意見交換会の開催

一宮支部の組合役員、新規就農者、ＪＡ、一宮町、農業事務所が参加し、一宮支部の課題や今後の取組について率直な意見交換を行った。

出席者からは、「生産者数・栽培面積の減少が深刻であり、担い手の確保が急務であるが、圃場確保が難しく、新規就農者の受入れが進まない現実がある。」「組合内でも意識の差が大きく、合意形成が課題となっている。」といった意見が挙げられたほか、新規就農者からは「研修後に確実に農地を確保できるようにしてほしい。できれば、まとまった圃場を用意してほしい」、「農機具や機械を置く場所が必要」、「他産地との比較において、この地域で就農するメリットやフォロー体制を明確にすべき」、「規模拡大のために雇用への支援もしてほしい」といった意見が挙げられた。

農業事務所からは担い手の確保の方法として他県の先進事例（研修と園地確保を一体化したトレーニングファーム等）を参考に「一宮町トレーニングファーム（仮）」を提案し、導入可能性を検討した。議論を通じて産地としての方向性を共有し、研修体制と園地確保を一体的に進める必要性を確認した。



写真２ 先進事例の視察

３ 活動の成果

産地協議会と意見交換会を通じて、担い手不足や園地確保の課題に加え、今後の取り組みについての方向性を共有することができた。

既存の生産者の規模拡大や老木化対策の新植・改植、省力化技術の導入、繁忙期の労働力確保の必要性について、産地全体で課題を共有することができた。

新たな計画では「県内一の早出し産地という地位の維持」、「担い手の確保・育成による持続的な産地の育成」、「求められる梨品種と販売戦略による所得の向上」の３つの方針を柱とした。一宮支部では栽培面積を維持するため、生産者の規模拡大や新規就農希望者の受入れ体制の整備、就農後の定着支援、繁忙期の労働力確保や新植・改植の計画的な実施等に取り組むこととした。

４ 将来の方向と課題

「ながいき梨」が今後も消費者に支持される産地であり続けるため、担い手の確保と持続可能な産地の育成が重要となる。

一宮支部では、既存の生産者の規模拡大に伴う労働力確保のため農福連携や１日農業バイト等の活用を促すとともに、樹齢構成や作業効率改善のため省力樹形の新植・改植を促す。また新規就農者の受入れ体制の整備や定着支援を行うため、研修受け入れ農家となりうる生産者の意識醸成、研修の運営体制の検討、トレーニングファームの設置など具体的な内容の検討を進めていく。

５ 担当者 東部グループ

20年後の長生地域の水稲生産を守るために

— 「次世代の水稲生産者育成研修会」を開催 —

活動事例の要旨

水稲経営が大規模化するにつれ孤立する傾向にあった若い担い手26名を対象に育成研修会（全9回）を開催し、資質の向上と相互交流を図った。水稲経営に対する関心が高まり、同年代の水稲経営を志す仲間として交流が進んだ。令和8年度には視察等を通じてさらに学習を深め、次世代の担い手を育成していく。

1 活動のねらい・目標

平成後期から続く米の価格低迷により、水稲農家数の減少と担い手への農地集積が進み、長生地域の水稲作付面積4,583ha（令和6年）のうち、約4割の1,814haを約80経営体が担うようになった。そのうち50戸は個別経営体で、平均耕作面積24ha、経営主の平均年齢が58才と大規模化と若返りが進んでいる。一方で、大規模化により担い手間の情報交流が乏しくなり、若い経営者や後継者の孤立化が進んでいた。

そこで個別経営体の若い経営者及び後継者を対象とした2か年の集合研修「次世代の水稲生産者育成研修会」を開催し、若い担い手の資質向上と交流の促進を図ることで、地域の水稲の担い手の育成と組織化を目標とした。

2 活動の内容

令和6年末から研修会を企画し、長生農業協同組合の協力を得て開催することになった。地域の若い担い手に参加を促し、26名の参加申し込みがあり、研修会や情報交換会を開催し、基本技術の理解や担い手相互の交流を深めていった。

(1) 研修会の開催

研修会は1年目に基礎知識の習得、2年目は視察等による実践的な知見を深めることを目標として開催した。

表1 研修会開催実績

	開催日	内容	場所
1	3月6日	・開講式 ・水稲育苗、水稲生育調査方法について（講義）	長生合同庁舎
2	6月6日	・代表ほ場での生育状況確認（現地） ・最高分げつ期の生育管理について（講義） ・中干と倒伏軽減対策について（講義）	茂原市東郷福祉センター

3	6月19日	・ドローン施肥について（視察）	室川農園ほ場
4	6月23日	・代表ほ場での生育状況確認（現地） ・幼穂の確認方法、穂肥の施用について（講義） ・カメムシの防除について（講義）	茂原市東郷福祉センター
5	7月8日	・水稻種子の生産について（講義） ・原種の生産について（講義） ・品種による生育の違い（視察）	千葉県農林総合研究センター水稻・畑地園芸研究所成東育成地
6	7月30日	・収穫適期の判定について（講義） ・補助金の知識、活用する方法について（講義） ・収穫トラブル防ぐ点検整備（DVD視聴） ・代表ほ場での生育状況確認及びライスセンター視察（現地）	茂原市東郷福祉センター
7	10月7日	・収量構成要素調査について（講義） ・令和7年産の作況・品質について（講義） ・次年度作付け計画について（検討会）	長生合同庁舎
8	12月8日	・決算書の読み方と経営管理について（講義） ・土づくりと施肥について（講義）	JA長生 本所
9	3月9日	・水稻の育苗について（講義） ・水稻育苗の実際（視察） ・閉講式	JA長生グリーンウェブ 室川農園



写真1 座学での研修



写真2 ドローンによる追肥を視察



写真3 品種による生育の違いの学習



写真4 ライスセンターを見学

(2) 情報交換会から仲間づくり

開講式、7月の研修後に情報交換会の機会を設け、研修生同士の交流を図った。同じ市町村でも初対面の顔合わせも多く、お互い連絡先を交換して仲間づくりが進んだ。

3 活動の成果

研修会での基礎的な学習に加え、視察や相互訪問を通して栽培や経営についての情報を交換し、経営者としての資質が向上した。「水稻栽培について関心が深まり、作業自体は把握していたものの、その目的までは理解できていなかったのが参考になった」「とても勉強になっている」などの感想が寄せられた。また、研修生のみならず、JA職員や各資材メーカー等との交流が進み、資材等の展示ほに取り組みなど栽培改善につながっている。より高度な知識の習得に向け、視察や研修等の要望が高まっている。

4 将来の方向と課題

研修2年目となる令和8年度は、地元の先輩農家等の視察を中心に事例学習を深め、知識の定着を図ると同時に地域をけん引する担い手としての自覚と成長を促していく。また、より相互交流を深め、自立した活動ができる地域の水稻学習組織として育成していく。学習組織の活動等を通じて経営者として成長し、将来の長生地域の水田を守る担い手への成長を支援していく。

5 担当グループ 西部グループ、東部グループ

水稲湛水直播栽培の普及に向けた取組

— 直播栽培の安定化に向けた栽培試験と技術普及 —

1 活動の背景・ねらい

中山間地域での直播栽培は、ほ場の均平や水管理等の条件により苗立ち率が悪く、十分な収量が得られていなかった。そこで、苗立ち率の向上と病害虫の初期防除が期待できるリゾケア®XL コーティング種子を使用した湛水直播栽培試験を令和5年から実施した。令和5年はリゾケア®XL コーティング種子の苗立ち率について試験を行い、令和6年は長生管内で課題となるジャンボタニシ対策を目的にした早播きを実施した。令和7年は、新たに湛水直播栽培に取り組む営農組合で点播機による収量の安定を図るための栽培試験を行った。また、JA長生と連携して、直播栽培の管理方法について理解を深めるため生産者及びJA職員へ定期的な研修会を実施した。

2 活動の内容

(1) 栽培試験

4月16日に点播機による播種を行った。試験を行った組合は収量を安定的に確保したいということから点播機を他組合から借りて播種を実施した。苗立ち率は58.5本/m²と理想的な本数となり、中干し時期を適期に実施したことで収穫時も倒伏が無く、収量は636kg/10aと移植栽培と同等であった。試験を実施した営農組合では、「育苗の手間や施設の必要がなく、初期病害虫の被害も少ない。十分な収量を得られたことから満足している。」という感想だった。次年度からは点播機を購入し、リゾケア®XL コーティング種子を活用した湛水直播種栽培に本格的に取り組む予定となっている。



写真1 点播の様子 (R7)



写真2 8月5日の様子 (R7)

(2) 研修会

長生管内では直播栽培及びリゾケア®XL コーティング種子が普及し始め、収量の安定及び向上には栽培者の技術の安定と向上が必要になっているが移植栽培

とは異なる管理が必要となる。栽培方法の理解を深めるため、直播栽培に取り組む生産者や生産者の相談役となるJA職員を対象に研修会を開催した（表1）。研修会では播種、中干し時期、幼穂形成期、出穂期等の各生育ステージでポイントとなる管理を学び、管内のリゾケア®XLコーティング種子の直播栽培を巡回しながら生育状況の確認を行った。

表1 研修会開催実績

研修会	開催日	内容	参加者
第1回	1月28日	直播栽培の概要 リゾケア®XLコーティング種子について	JA職員5名
第2回	2月18日	リゾケア®XLコーティング種子の栽培手順 ポイントとなる管理・ほ場選定について	生産者12名 JA職員3名
第3回	5月23日	播種後の管理、ほ場巡回	生産者3名 JA職員4名
第4回	8月5日	収量調査、管理指導の振り返り、雑草の種類	JA職員4名
第5回	10月22日	R7水稲栽培における情報提供、意見交換	生産者2名 JA職員4名



写真3 第2回研修会（2月18日）



写真4 第4回研修会（8月5日）

3 今後の取組

長生管内は一部のほ場でのり面が高いため、のり面に機械などを上げるときは前方に人が乗り、田植え機が横転しないように対策している。ドローンを活用することで事故のリスクも防ぐことができ、人員も削減可能となる。ドローン播種は労力削減効果が高いが、播種ムラや生育ムラが目立ち、収量が低い事例がみられる。引き続き、安定した収量のため栽培技術の向上を支援する。

4 担当グループ 西部グループ

地域に愛され、活気ある直売所を目指して

— 地域農業・産地力アップ女性リーダー講座修了生の活動 —

1 活動の背景・ねらい

女性農業者は県の農業就業人口の41%を占めており、地域農業や産地振興において重要な役割を果たしている。女性が経営に参画している経営体は、販売額や所得が向上するなど個別経営における活躍事例はあるが、地域農業や産地においては、女性農業者の声が反映された取組はまだ少ない。

そこで、県では令和3年から地域農業に参画できる女性リーダーの育成を目指して、「地域農業・産地力アップ女性リーダー講座」を開催してきた。

管内からは、農事組合法人長生産直の推薦を受けた女性農業者2名が参加した。2年間の受講をとおして作成したステップアッププランを産直組合に提案し、活動する仲間を増やしながら、直売所「げんきの里ひまわり」の売上アップに向け活動している。

2 活動の内容

(1) 県女性リーダー講座をとおした計画づくり

地域農業・産地力アップ女性リーダー講座では、農業、農政の現状、食品流通等の専門講義、女性活躍事例などを学び、所属組織の課題を話し合った。取り組む課題は、「直売所の午後の集客アップ」とし、解決を目指したステップアッププランを作成した。プランは産直組合の各部会に提案し、組織の理解と協力を得ながら活動できるよう支援した。

(2) 長生産直女性部「エプロンの会」との連携

2人が所属する女性部と令和4年から連携し午後の集客を目的としたタイムイベントを始めた。

イベントの開催時期は、バレンタイン、七夕、ハロウィンに併せ従業員の協力も得ながらチラシの作成や案内板の設置、来客者が楽しめるよう店内の飾付を工夫した。また、女性部員が参加しやすいよう

活動時間を区切り、令和7年は新米

おにぎりの配布や、タマネギの詰め放題とワクワク楽しめる内容で集客アップを図った。イベント開催時に併せて直売所への要望を聞き取り、来客者の声を産直組合に提案し、活気ある直売所づくりに向けた取組を行っている。



写真 七夕イベント！女性部エプロンの会

3 今後の取組

(1) 産直組合と連携した直売所の集客アップに向けた活動の継続

(2) 女性部活動の充実と地元農産物とコラボした商品開発

4 担当グループ 西部グループ、東部グループ

トマトの高温対策の取組

— 裂果に強い「麗妃」の普及 —

1 活動の背景・ねらい

近年の夏期の猛暑により、トマトが裂果し出荷量が減少している。そのため生産者の栽培技術と所得の向上、J A長生施設野菜部会の出荷量の増加を目指し、部会・J A長生と連携して、裂果に強い「麗妃」の品種選定説明会等の講習会の開催や全戸巡回の強化を行い、産地の生産力強化に取り組んだ。

2 活動の内容

(1) 各種講習会や毎週の巡回指導

裂果に強い「麗妃」の導入を進めるため、5月は前年度実施した品種比較試験の結果を基に、収量の優位性や品種特性による栽培時の注意点等を周知する「品種選定説明会」を開催した。また7月に開催した栽培講習会でも再周知を図った。更に個別巡回を強化し、定植後の8月から10月まで毎週、全戸巡回を実施した。夏期のかん水の重要性を伝えるため、品種や樹勢に合わせた適正なかん水・回数を指導すると共に、サーモグラフィーカメラを使ってかん水前後の地温を可視化することで地温の変化を説明した。

(2) 現地圃場の情報交換会

10月に篤農家の圃場で部会員と情報交換会を行った。篤農家の栽培管理や「麗妃」の樹姿を各自の圃場と比較することで生産者の知識や意識向上に繋がった。また「麗妃」を導入した人達から良好な結果だったと等の意見も交わり、活発な情報交換会となった。



写真 圃場での情報交換会

(3) 高温対策の取組結果

「麗妃」を導入した生産者は裂果による規格外が少なくなり、昨年度を上回る収量となったため、次年度は部会の面積の5割以上に導入される。また巡回時には、かん水前と後の地温差を生産者に見せたことで、夏期は全生産者が毎日かん水し、一部の生産者では1日2回以上のかん水をするように行動が変化した。

3 今後の取組

産地の生産力強化を図るため、今後も「麗妃」を導入する生産者が上手く栽培できるようサポートしていく。また品種以外の高温対策についてはかん水や遮光といった既存の対策だけではなく新しい対策の情報収集も図り、生産者に還元していく。

4 担当グループ 東部グループ

たまねぎ収量増加を目指したべと病防除に向けて

— 産地全体へ向けた、べと病防除方法の周知 —

1 活動の背景・ねらい

たまねぎ栽培で課題となっているべと病は孢子が風で飛散するため、産地全体で防除する意識が必要である。そのため、白子町玉葱出荷組合に属していない生産者も含めて防除方法を周知し意識向上を促すとともに、将来的な集団防除を視野に入れた防除体系の構築に向けて取り組んだ。

2 活動の内容

(1) 産地全体への周知及び組合員への指導

べと病の適期防除について、組合に属していない生産者も含めた産地全体への周知方法をJAや役場と協議し、JAを通じて組合員に適期防除のFAX通知3回、役場を通じて町内回覧で組合員以外の生産者にも防除チラシを2回配布することで注意喚起した。また、組合員に対しては講習会や個別指導を行った。さらに、被害調査を実施し、組合員や関係機関と被害状況を情報共有して防除意識の向上を図った。

その結果、組合員向けのアンケートでは令和7年の被害は例年より減少したとする回答が81%と高く、被害面積割合も令和6年の18%から10%に低下した。周りの生産者に声掛けや、防除回数を増やした組合員もあり、防除に対する意識が向上した。

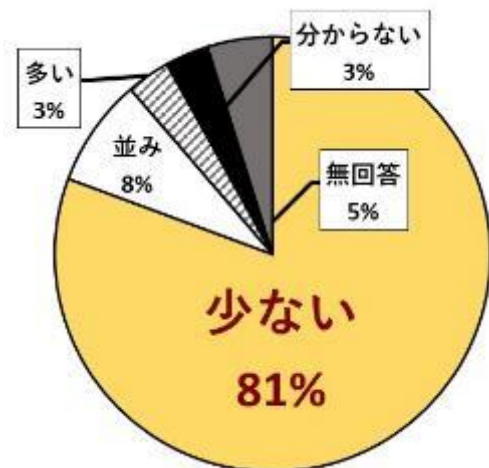


図 例年と比べた、べと病被害割合

(2) ドローンによる集団防除に向けた取組への支援

令和5年から6年にかけてJAや全農と連携してドローン散布による防除試験を1ほ場で実施し、防除効果を確認した。その結果をもとに集団防除に向けた今後の進め方について関係機関と協議し、組合員の意向を確認するためのアンケート調査を実施した。

3 今後の取組

産地全体へ向けたべと病の注意喚起について引き続き行っていく。また、組合員向けのアンケートより集団防除の希望が一定数確認できたことから、関係機関と連携して防除範囲を広げたドローン散布試験の実施や防除体系の構築に向けて支援していく。

4 担当グループ 東部グループ

イチゴの栽培技術向上と新規就農者支援

— 「長生いちご研究会」活動を通じて —

1 活動の背景・ねらい

長生地区では、近年、いちご経営の新規参入者が毎年のように就農している。今年度は1名が新たに就農し、2名が長生農業独立支援センターを通じて研修を行っているほか、数名が新規参入を目指して独自に準備をしている。現在、当地区にはいちごの経営体が15戸あるが、出荷組合はなく個別に観光いちご狩りや直売等を行っており、このうちの9戸が参加して学習研究団体「長生いちご研究会」（以下、研究会）を組織している。研究会は県いちご連に加入し、個々の技術向上に努めるとともに、会員間の情報交換や交流の促進を図っている。今年度は、相互ほ場巡回を通じ、育苗初期からの栽培技術向上、新規就農者の定着促進等の支援を行うとともに、会員の拡大を図った。

2 活動の内容

(1) 育苗ほ場巡回（5～8月）

病虫害のない優良苗の育苗を目指して技術指導や会員間の情報交換等を行った。今年初めて育苗に携わる生産者もあり、先輩生産者から積極的にアドバイスが行われた。また、新規就農予定者に研究会活動への参加を呼びかけたところ、今年度就農の1名が加入し、研修生等2名が仮加入して活動に参加した。



写真 育苗ほ場巡回の様子

(2) 花芽検鏡会（9月）

定植適期を知るため花芽検鏡会を開催したところ、6名が参加し、持ち寄った苗を自ら検鏡した。高温の影響からか未分化の品種が多かったため、より正確な定植適期を知りたいと、後日自主的に検鏡を行った若手生産者もいた。

(3) 生産ほ場巡回（10～3月）

ハダニ類、アザミウマ類などの微小害虫防除対策を中心に情報交換、指導を行った。農薬メーカーの担当者も交えて、天敵の導入時期とそれに向けた農薬散布の時期や農薬の種類などを検討した。

3 今後の取組

研究会では技術を囲い込まず、積極的に情報交換を行うことで、互いの技術を向上させている。特に新規就農者に対しては、皆で育てて行こうという雰囲気があるため、これが継続されるよう引き続き支援していく。

4 担当グループ 西部グループ

持続可能な農業と環境保全への取組

— プラスチックを使用しない水稲元肥一発肥料の模索 —

1 活動の背景・ねらい

水稲栽培では省力化を目的として元肥一発肥料の利用が進んでいるが、近年被覆に使用されるプラスチックが河川や海へ流出することが問題となっており、流出防止の対策が求められている。そこで、硫黄を被覆材としたプラスチック不使用の元肥一発肥料を用いた栽培試験を行い普及性について検討した。

2 活動の内容

(1) 栽培概要

試験は白子町の同一ほ場（砂質土壌）で2年間実施した。同圃場内に試験区と慣行区を設置し、試験区には硫黄を被覆材とした硫黄コートブレンド 2000(20-10-10)を施用した。硫黄コート肥料は、硫黄被膜の溶解により肥料成分が徐々に溶出する特性を有し、プラスチック不使用の元肥一発肥料である。慣行区にはプラスチック樹脂を使用したコシヒカリー発 15 改 (20-12-12) を施用した。品種は「コシヒカリ」とした。

(2) 栽培結果

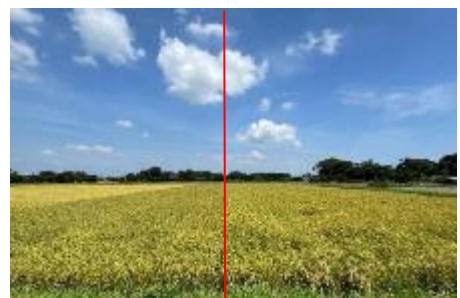
生育については、硫黄コート肥料を施用した試験区は出穂期までの葉色は慣行区と同程度またはやや高く推移し、初期生育は安定して確保された。試験区で稈長が長くなる傾向も見られたが、倒伏についての差は認められず、作業上の支障は見られなかった。出穂期以降の葉色や収穫期の穂数は年次によって変動が見られた。

収量については、坪刈り調査では1年目は試験区が慣行区をやや上回り、2年目はやや下回る結果となったが、農家実収量では2年間を通じて両区に大きな差はなかった。

玄米品質については、登熟期が高温となり試験区で乳白粒や基部未熟粒の発生がやや多かったが、実需や作業面で大きな問題となる水準ではなかった。

3 今後の取組

今回の試験では、硫黄コート肥料を用いた元肥一発施肥により、慣行と同程度の収量が得られることが確認できた。今後は、施肥量の検討や他品種への適用の検討を行っていく。



4 担当グループ 東部グループ、西部グループ

写真 生育の様子（収穫直前）
（左：試験区 右：慣行区）

牛が快適に過ごせる環境づくりを目指して

— 取り組みやすい暑熱対策における効果の検討 —

1 活動の背景・ねらい

近年の夏季の異常な気温上昇により、暑さに弱い乳牛は強い暑熱ストレスにさらされており、乳量・乳質・繁殖成績の低下に加え、死産する事例が発生している。そこで、取り組みやすい暑熱対策技術として牛舎内の送風機の清掃・角度調整を行い、体感温度を下げることによる改善効果を検証した。

2 活動の内容

(1) 暑熱対策調査概要

3～4頭に1台の間隔で送風機が設置してある牛舎内で送風機の清掃・角度調整を実施する改善区を設けて慣行区と比較した。送風機の清掃はエアークンプレッサーやブラシを用いて汚れを落とし（写真1、2）、角度調整は送風機を支えているロープの長さを調整した。

(2) 調査結果

清掃と角度調整の作業時間は1台当たり約30分であった。送風機の清掃を行うことで送風機の風速が15%向上した。また、慣行区ではすべての牛床で推奨風速（2～3m/秒以上）に及ばなかったが、清掃と角度調整を行った改善区では牛床の5割で推奨風速の風が当たるようになった。風が当たるようになったことで、牛の呼吸回数が減少し体力消耗の抑制につながった。さらに、5月から9月の減少乳量は昨年と比較して1.4kg/日・頭抑制できた。加えて、分娩から次の妊娠までに要する日数は17日短縮した。

生産者からは夏場でも牛がいきいきとし、飼料をよく食べるようになったとの声があり、送風機の風が当たらない場所へ新たな送風機の導入が行われた。

3 今後の取組

今回の調査では、送風機の清掃・角度調整を行い牛体に風をあてることで夏季の乳量・繁殖成績の低下抑制、夏の疲労の影響による秋の乳質低下を抑制する効果が確認できた。管内農家への情報共有を行い、今後も効果的な暑熱対策技術の普及に努めていく。

4 担当グループ 東部グループ



写真1 送風機の清掃前



写真2 送風機の清掃後

長生地域の農業を担う青年農業者の育成 ～令和7年度農業経営体育成セミナーを開講しました～

長生農業事務所改良普及課 令和7年5月29日発

県では新たに農業を始めた青年農業者を対象に、基本、専門、総合研修の順に3年間で段階的に研修を行い、農業経営者としての資質向上を図っています。

長生農業事務所では、5月22日に令和7年度長生農業経営体育成セミナー開講式と第1回研修会を開催しました。今年度は、新たに7名が仲間に加わり計29名で研修がスタートしました。開講式では、指導農業士、農業士、女性農業者、青年農業者組織、関係機関が来賓として出席し、受講生への祝辞や励ましの言葉が贈られました。受講生からは「収量アップを目指し、売り上げを伸ばしたい。」「失敗を糧にし、いろいろなことにチャレンジしたい。」など、農業の明るい未来に向けた力強い抱負が語られました。

管内は、セミナー生のうち新規参加者が7割以上を占め営農品目も多様化している中、地域との良好な関係を築きながら、経営発展を目指す青年農業者を育成していきます。



意欲あふれる青年農業者が集いました



基本研修生に青年農業者グループの活動を紹介

若木管理講習会を開催しました！

～なしの生産量の維持に向けた、若手生産者への栽培指導～

長生農業事務所改良普及課 令和7年7月15日発

新規就農者が増えつつある一宮・岬梨組合の若手生産者組織の研究部は、6月5日に若木管理講習会を開催しました。講習会では、千葉県梨ワンストップ相談窓口アドバイザーと連携して現地指導を行いました。

長生農業事務所からは、ナシの若木の栽培管理について、現地の生産者の圃場で実際に適切な管理を行っている樹を見本にして説明を行いました。

生産者からは、樹形別の主幹の切り返し位置や主枝候補枝の誘引方法などについて質問が寄せられ、アドバイザーから誘引方法の具体的な補足説明がありました。

生産者からは、「若木管理の一連の作業について知ることができて良かった」、「アドバイザーから詳しい説明を聞いて理解が深まった」などの感想が聞かれました。

農業事務所では、今後もなし産地の活性化に向けた支援を継続していきます。

※千葉県梨ワンストップ相談窓口とは、(公社)千葉県園芸協会に開設された窓口で、梨の新規就農者に対して栽培技術等の助言を行うアドバイザー(専門家)の派遣を行っています。



なし若手生産者へ説明を行う様子



アドバイザーの説明を聞く生産者

集まれ！畑女子

～ 畑女子のための農業機械研修会を開催 ～

長生農業事務所改良普及課 令和7年10月14日発

10月1日にねぎの栽培を始めて間もない若手女性農業者を対象に、主体的な経営参画を目的として「畑女子セミナー」を開催し9名が参加しました。セミナーは、井関農機株式会社と連携し、農作業安全に関する講義と、農業機械の基本的な点検整備等について実技を行いました。専門講師の丁寧な指導の下、トラクターと管理機の安全操作のコツと機械を長持ちさせるためのポイントについて学び、参加者からは、「管理機が倒れヒヤリとした経験があり、安全な機械使用について再確認できた」、「現場で生かせる知識が得られた」との声が寄せられ、意義のある研修となりました。

農業従事者が減少する中、農村地域の維持や農業経営の発展に女性農業者の経営参画は欠かせません。今後も農業事務所では、経営者として地域農業をけん引できる女性農業者を育成していきます。



農作業安全についての講義



トラクターの安全な操作方法を学ぶ畑女子

優良事例から学ぶ！「総合防除」視察研修会を実施

～ 百聞は一見に如かず ～

長生農業事務所改良普及課 令和7年11月11日発

長生地域ではトマトが盛んに栽培されていますが、微小害虫が媒介するウイルス病の発生が続いています。その被害を防ぐためには、ハウスの開口部に防虫ネットを張ること、栽培終了後に作物を適切に処分することや定期的な薬剤散布などを「総合的」に行うことが重要です。

そこで、10月28日にJA長生施設野菜部会の有志3名・富津市の生産者1名・JA長生・県関係者が集まり、「総合防除」に取り組む優良な事例を学ぶために視察研修会を実施しました。参加者からは育苗方法や苦労したことなどの質問が多く挙がり、防虫ネットについては、自分自身のハウスに帰ってから実践できるように、メジャーを使って熱心に計測していました。また、夏の栽培管理等についても、活発な意見交換がされました。

今後も農業事務所では農業者の課題解決を支援し、産地振興に取り組んでいきます。



育苗方法を学ぶ参加者



天窗の防虫ネットを計測する様子

令和7年度普及活動の実績
普及活動の軌跡
(Part-31)

発行年月 令和8年3月

発行 千葉県長生農業事務所 改良普及課

〒297-0026

千葉県茂原市茂原1102-1

TEL 0475-22-1771

FAX 0475-25-2061

URL <https://www.pref.chiba.lg.jp/ap-chousei>